享保年間のごく始めのころ、江戸の町で、俗に「手拭い心中」と呼ばれる心中が、一年半ほどのあいだに四件続いたことがある。

四件とも、互いの手を手拭いで縛り、離れないようにして水中へ投身したもので、うち三件は首尾良くふたりとも死んだが、最後の一件だけは飛び込んだ拍子に手拭いがほどけて、思わず水をかいて泳いでしまった男の方が助かった。生き残った男は、流行の手拭いなど使わずに、心中のならいに従ってしごきで手を縛っておけば、自分だけこんな生き恥をさらすことにはならなんだと大いに悔やみ、助けた者の涙を誘ったという。

この〝流行の手拭い〟とは、先の三件の心中でも使われたもので、この当時日本橋通油町に在った、とある木綿染手拭問屋が作り、そこだけで売っていた品である。問屋だから本来は卸すのが商いで、自分たちで染めたり仕立てたりを手がけるわけはない。だからそもそもは、ここの主人が洒落者で、色柄を工夫した手拭いを少数作り、盆暮れの挨拶に得意先に配ったというだけの、言ってみれば趣味の物だった。それが思いのほか評判をとり、これならいくらかは商いにもなるかもしれないと踏んで売りに出したところ、予想以上に

当たってしまって、いちばん驚いたのは当の主人だったという話である。

よろず世の中で当たる物には理由がある。ここの手拭いは意匠が良かった。いわゆる〝物語模様〟という趣向で、源氏物語や伊勢物語、御伽草子などのお話の一場面を絵に描いて、それを染め抜いて使ったのである。小ぎれいに作るには、やはり恋物語の場面がよろしかったようで、とりわけ人気の高かったのが源氏物語だった。先の四件の心中事件でも、男女が互いの手首を縛るために用いたのは、そろってこの源氏物語版の手拭いであったというわけだ。

思いをとげた三件の心中では、それぞれ「若紫」「浮舟」「明石」から材を得た絵柄を使った手拭いが用いられていた。失敗に終わった四件目の心中の手拭いのそれは「夕顔」で、絵柄も夕顔の花に片輪車模様が配してあったという。いかにも片方だけが残ってしまいそうな、寂しげな意匠である。

それでなくても心中や相対死は御法度であるから、未遂に終わったとはいえ四件目を数えるに至って、お上もようやく重い腰をあげた。この当時、まだ例の引き締め一方の御改革は始まっていなかったが、本来とことん実用的な物であるはずの手拭いに、不必要に贅沢な意匠をこらして売りさばき、しかも心中の男女の心をくすぐったという咎で、製造元の木綿問屋は当主は遠島、身代は闕所の憂き目にあって、店はこの一代でつぶれた。結局は、ずいぶんと高くついた趣味であったということになる。

世間は間もなく、このことを忘れた。だが、物語模様の染め手拭いのことは、同業者た

ちのあいだでは細々と語り伝えられてゆく。商いの本道には何が肝心かという訓話でもあり、染め手拭いの工芸品としての面白さを語る逸話でもあるから、好んで語る店主やお内儀がいても不思議はなかったわけである。

さて、時代は下がって文化四年――

「大黒屋さんは奉公人の躾には厳しいお店だ。辛いことも多いだろう。だがな、厳しい方が結局は楽なんだ。だいいち、あそこで務まればどこでも務まる。若いうちの苦労は買ってでもしろというのは、本当のことだよ。楽して生きる何よりの近道は、結局は真面目に働くことだ。いいな、忘れるんじゃないよ」

銀次を通瀬戸物町の木綿問屋「大黒屋」に送り出すとき、万年屋の親父はつるりと丸い頭をちょっと右にかしげて、妙にしみじみとした口調でそんなことを言った。銀次はその言葉を、何度お店を世話してもらっても奉公が続かず、結局は遊び人同様の暮らしに落ちてしまって、今はどこでどうしているかも定かでないすぐ上の兄のことをあてこすったものだというふうに聞いて、ひどく惨めな気持ちになった。

万年屋は大伝馬町一丁目にある口入屋で、親父ひとりの小さな店ながら、大伝馬町一帯から室町、宝町、駿河町、日本橋通町あたりに連なる数多くの木綿問屋に長いこと奉公人を入れている、信用の篤い業者である。ここの親父を悪く言う口は、大川沿いに生い茂る葦の節目まで分け入って探しても、どこにも隠れていないだろう。

銀次のおふくろは、ごく若いころにこの親父に世話になり、奉公に行った先で会った銀次の父親と所帯を持ち、次々と六人の子をなして、今度はその子供たちを順に奉公に出すために、また親父を頼ることになった。十五年からの時が空いているのに、親父はまったく変わっておらず、まるでお化けのようだとおふくろが驚いているのを、銀次も耳にしたことがある。

長兄は五年前、万年屋の計らいで大伝馬町一丁目の柏屋に入った。先頃ようよう手代になって、重宝されているようである。だが次兄は例のていたらくだ。これが長兄のいい実績を全部帳消しにしてくれたので、万年屋の親父の信用がなければ、銀次には奉公先が見つからないところだった。

銀次は十四歳、三男坊で、下には妹がふたりと末の弟がひとりいる。これはまだ幼子だからともかくとして、妹たちはそれぞれ子守奉公や女中奉公に出られる年頃だから、彼女たちの将来の働き口に障らないようにするためにも、大いに気張って働かねばならない。彼としては子供なりに堅い決意を抱いているつもりだが、それでも上乗せに「真面目にやれ」と念を押されると気が滅入った。

そのせいか、実際に奉公にあがってみると、あれこれ気に病んだり気を回したり気負ったりしているよりも、ずっと気が楽になったのが面白い。確かに大黒屋はうるさく厳しいお店で、来たばかりの丁稚の小僧など人間扱いはしてくれず、銀次の名前さえ覚えてはくれない。おいこらで追い使われる毎日だ。だが、それは奉公人なら誰でも通り抜ける当た

り前の処遇で、日々の暮らしは、骨の芯までくたびれるほどに働かなくてはならないけれど、心のなかは安らかだった。

以前、藪入りで帰ってきたときに長兄がこんこんと説いて聞かせてくれた話では、彼の奉公先では古参の奉公人たちが傍若無人に幅を利かせており、年長の手代たちからそれはそれはひどい虐めをされたそうで、飯は抜かれるわ便所に突き落とされるわ、布団蒸しにされるわ殴られるわ蹴られるわ、話だけ聞いていると、兄貴は大伝馬町の木綿問屋ではなく牢屋に入ってしまったのではないかと思うほどだった。だが、大黒屋の銀次の身の上に、そんなことは起こらなかった。なるほど万年屋の親父は嘘をつかなかった。厳しい方が結局は楽だというのはこういうことなのだろう。

大黒屋の主人夫婦はそろってまだ四十代半ばで、きりきりと先頭に立って商いを切り回している。彼らの目が隅々にまで届いているということが、この店の背骨がきりっと伸びている理由のひとつだろう。万年屋の親父が、大黒屋は旦那が船頭だからいいんだというようなことを言っていたことがあるのを思い出して、銀次は子供なりに納得したものである。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。